

第7回 備後探訪会

～備後地方の遺跡・国宝・寺社を訪ねる～

平成25年10月27日（日）

主催：岡山歴史研究会

【 旅 程 表 】

集合時間：平成25年10月27日(日曜日) 7時45分集合

集合場所：岡山駅西口バスセンター

参加費：5,000円(バス代、弁当代、保険代、資料代等含む)

岡山駅西口出発 8:00→岡山IC 8:15→SA(トイレ休憩10分)→福山東IC 8:55
→神辺駅近くバス停(平井悦夫氏乗車) 9:10→備後国分寺跡 9:20(滞在30分)
→備後国分寺跡出発 9:50 →小山池廃寺(車窓より)→最明寺跡(駅家跡 車窓より)→二子塚古墳 10:20(滞在30分 説明:文化課)→出発 10:50
→しんいち歴史民俗博物館 11:05(滞在説明30分)→出発 11:35
→備後吉備津神社11:40→参拝10分 説明30分(権禰宜:尾多賀晴悟氏)→
昼食 12:20(30分)→備後吉備津神社出発 12:50→広島県立歴史博物館
13:30(滞在70分)説明20分 観覧50分→出発 14:40
→明王院 15:00(滞在80分)→出発 16:20 →福山東IC 16:40 →SA(トイレ休憩10分)→岡山IC 17:30 →岡山駅西口到着 17:45

案内人・アドバイザー：野崎豊(岡山歴史研究会顧問)

担 当：大月基司・遠山義雄・平井悦夫

二子塚古墳ガイド：平林工先生(福山市教委文化課 学芸員)

備後一宮 吉備津神社：尾多賀(おたが)晴悟様(権禰宜)

広島県立歴史博物館：中山愉希江先生(学芸員)

明王院ガイド：三谷干城(たてき)様

明王院住職：片山弘雄(こうおう)様

資料作成者：大月基司

備後国分寺

福山市神辺町大字下御領



天平13(741)年、聖武天皇は次のような詔を発して全国の国司に命じた。

高さ1丈6尺の釈迦の仏像を造れ。**七重塔**1基を造営し、**金光明最勝王經**と**妙法蓮華經**を書経せよ。そもそも七重塔を建立する寺は、**国の華**ともいべきで、必ず好い場所を選べ。人家近く悪臭が及ぶ所、人家遠く参集の人々を疲れさせる所は良くない。国司等は国分寺を厳かに飾り清浄を保つ様にせよ。また、国毎に建てる僧寺には、封戸50戸、水田10町を、尼寺には水田10町を施入する。僧寺には僧20人、尼寺には尼10人を住まわせ、寺の名は**金光明四天王護国之寺**、**法華滅罪之寺**とせよ。

こうして各国毎に建てられたのが**金光明四天王護国寺(国分寺)**と**法華滅罪之寺(国分尼寺)**である。しかし、国によっては財政的理由から新たな造営は行わず、既存寺院を充当したものもあった。そして思うように国分寺建造が進まないため天平19年「国分寺のうちにはまだ寺地も決まっていない所がある。だから時々天災が起きる」といって僧寺には水田90町、尼寺には40町ずつ追加し、造営を督促した。

建立されてからも度々災難に遭っている。永禄4(1567)年、兵火に罹る。

時の**神辺城主杉原盛重**再建。慶長五(1600)年、**福島正則**により寺領没収。

延宝元(1673)年、寺院の西側を流れる堂々川の洪水により草堂僅か一字残るばかりとなり、本尊及び十二神像は皆漂散してしまった。延宝7(1679)年、時の**福山藩主水野勝種**候網付山の材を用いて再建。元禄五(1692)年、薬師堂建立。その後方丈、仁王門を**如實上人**が建立し、「寺刹の形を成すといえど昔の二十分の一にもならず」(福山志料)、現在に至る。**本尊は薬師如来**で中世以後のものである。正式には**唐尾山醫王院国分寺**。

昭和47(1972)年から同51年にかけて発掘調査が

され、金堂跡、塔跡、講堂跡、南大門跡、築地跡等の伽藍配置から、東に塔、西に金堂、その背後に講堂が並ぶ**法起寺式**の配置である事がわかった。塔、金堂を囲む中門跡、回廊跡は未検出。寺域は東西180m、南北はそれより少し長いかわからない。また、西面築地跡は堂々川の堤防下となり調査はできない。塔、金堂跡ともに、基壇上の化粧や礎石は失われていた。わずかに**版築された基壇土**を確認。塔は一辺が18m、金堂は東西29.4m、南北20mと推定される。講堂跡は版築土と礎石列が検出され、東西30mと推定されたが南北はわからなかった。大量の瓦、須恵器、緑釉陶器が出土した。瓦は奈良期から室町時代に亘るものが出土している。更に寺跡の下層には弥生時代の集落跡も埋もれている。**御領遺跡**と呼ばれる広域にわたる**弥生時代集落跡**が眠る一帯に含まれている所でもある。南から北に伸びる長い参道には、南大門跡・講堂跡等の石碑が建てられている。参道の両側には昔の建物の礎石であったであろう平らな石が多く見られる。境内の一角の最上段の石垣の下に三体の石地藏と並び、明和一揆の首謀者で処刑された、**好右衛門義拳之碑**が建っている。また、裏山一帯は**国分寺裏山古墳群**と呼ばれていて古墳が多い。**八十八ヶ所巡り**にもなっている。(根岸尚克)

小山池廃寺跡

福山市神辺町大字湯野

神辺町の国分寺前の道を西に約600m行くと江戸時代初期に築かれたといわれる小山池がある。池の浚渫時等に古瓦や礎石が採集されること、国分寺から近いことから**国分尼寺跡**ではないかといわれてきた。昭和51・52年発掘調査が行われた。

その結果、塔の跡を始めとして三棟の建物の基壇が見つかり、その北側で瓦を焼いた窯跡も見つかった。

塔の基壇は一辺13.2m、高さ1.2~2.1m、側面に割石が積まれていた。

1.7mの礎石もみつき、深さ10cmの舍利孔があった。塔の跡の西には、東西32.4m、南北14.4mの基壇があり、講堂跡と思われる。さらに塔の跡の東の八幡神社の社殿の下にも基壇があった。これは金堂の跡であろうか。これら三棟の建物は塔を中心に東西一列に配置されている。白鳳~平安時代後半の軒丸瓦、軒平瓦も見つかった。最も古いものは持統天皇の藤原宮出土のものによく似た軒瓦で、このことから創建は白鳳時代

の終り頃で、国分尼寺建立の詔の出された天平13年より遡ることとなる。この寺はこの地方の豪族の氏寺であったものを国分尼寺として転用されたものかもしれない。創建当初よりの藤原宮式の瓦の出土から中央政府との密接なつながりがうかがわれる一族の氏寺であったのであろう。国分寺と共通の軒瓦も出土している。全国的にみても国分寺と国分尼寺の距離は5～600mであることからこの遺跡は国分尼寺跡と見て間違いない。
(根岸尚克)

最明寺跡

福山市駅家町大字中島

福山市駅家町大字中島に所在する。JR福塩線の近田駅から東北東に約300m離れた丘の上に位置し、かつて北方にある最明寺の所有地があったことや古瓦が出土することから最明寺の故地と伝えられてきた。一帯は比較的平坦で、小祠の境内地や畑などもあるが民家が立ち並び、出土する瓦が葺かれた建物やそれに付属する施設などの痕跡は不明である。ただ、民家の建築時に確認された礎石と思われるものと掘り出された瓦などが記録されている(*1)。また、南側に接した傾斜地にある最明寺跡南遺跡の発掘調査では、古代の遺構として掘立柱建物跡3棟、柵1条、溝1条、祭祀遺構と考えられる埋納土坑1基などが検出され、溝は最明寺跡の西端を区切っていた可能性が記述されている。さらに、奈良時代と考えられる多数の瓦と磚(せん)、須恵器などが出土し、磚を用いた基壇の建物の存在も推定されている(*2)。なお、最明寺跡南遺跡のすぐ南側はかつて切通しになっていたところで、古代の山陽道を踏襲する県道下御領新市線が通っている。

駅家町は福山市に編入される前は芦品郡に含まれ、芦品郡は品治(ほんじ)郡と芦田郡が合併したもので、駅家町域はかつて品治郡に属していた。承平年間(931～938)に成立した『和名類聚抄』の備後国品治郡の項には駅家郷が、康保4(967)年から施行された『延喜式』には**備後国に品治駅**があったと記されている。

そして、最明寺の山号が**馬宿山**であることから、本遺跡が品治駅跡ではないかとも考えられるようになった。さらに、『日本後記』の大同元(806)年の項の山陽道に設けられた備後国の駅館が瓦葺であることに注目した豊元國氏は、「瓦は奈良時代のものである。心礎が出ていれば別だがそれもなく、立地も岡の上では寺址とも思えず、

瓦の文様もしっかりしているのでは或いは駅家跡ではないかと考えている。」(*3)と記され、また、高橋美久二氏は本遺跡の南東方向に**馬ノ瀬**という小字があること、出土瓦が国府から出土するものと同じ文様であることなどから本遺跡の品治駅跡説を補強された(*4)。

なお、現在の駅家町の地名は、大正2(1913)年に中島村・倉光村・江良村・坊寺村・万能倉村が合併する際、品治駅があった駅家郷にちなみ、**駅家村**と名付けられたことから始まっている。車で訪ねた場合、周辺には駐車場がないので、民家をお願いしよう。
(篠原芳秀)

(*1) 小川高男『古最明寺』1978年

(*2) 福島政文編『最明寺跡南遺跡』福山市教育委員会・福山市埋蔵文化財発掘調査団 2002年

(*3) 豊元國「解説」『社会科標本室繪葉書第四輯 備後の古瓦特輯』広島県立府中高等学校生徒会1959年

(*4) 高橋美久二『古代交通の考古地理』大明堂1995年

駅家

駅家(えきかろうまや)とは、古代日本の五畿七道の駅路沿いに整備された施設。単に**駅**(えき)とも称する。

厩牧令によれば、原則として30里(現在の約16キロメートル)ごとに駅家が設置され、駅路に面して駅門を開き周りを築地で囲む構造(「院」)になっていたことから、「**駅家院**」と記される場合もあった。(当時の1里は約534m)兵部省の管轄下であり、実際の運営には現地の国司も関与していた。駅家の運営・修繕のために当初は駅稻(駅起稻)より、官稻混合後は現地国の正税より出挙が行われ、その利息が財源に充てられた。ただし、その体制は天平宝字年間には早くも揺らぎ始め、駅子・駅馬の疲弊や官人の規定に反する違法乗用などが確認されている。

『延喜式』には402の駅(駅家)が設置されていたことが記されている(ただし、『延喜式』は10世紀初期の規定であり、延暦年間以後進められた駅家の統廃合や新設などの影響で時期によって駅家の総数は異なっていたと考えられている)。

駅家には駅使が往来に必要とする駅馬とその乗具及び駅子が準備され、駅馬を飼育するための厩舎や水飲み場、駅長や駅子が業務を行ったり詰めたりするための部屋、駅使が宿泊・休憩を

取るための施設および彼らに食事を提供するための給湯室や調理場、それらの施設を運営するために必要な物資（秣・馬具・駅稲・酒・塩など）を収納した倉庫などが設置され、中には楼（駅楼）を備えた施設もあった。また、蕃客（外国からの使節）が大宰府から都に移動する際に用いられていた山陽道の駅家の建物は瓦葺で壁は塗壁とされていた。原則として駅使とその従者のみが駅家の利用を許されていたが、公私の目的を問わず位階・勲位を持つ者が旅行中に駅家で宿泊することは例外的に許されていた。駅馬は大路の駅には20疋、中路の駅には10疋、小路の駅には5疋配置されるのが原則であったが、駅そのものが持つ地理的条件などによっても増減があった。また、川沿いの駅には駅船が配置されていた。また、駅長や駅子は駅家周辺に置かれていた駅戸から出され、その中でも経験豊富で資力もある有力者が駅長を務めていた。大きな規模の駅の場合、付近にある郷全体が駅戸である場合もあった（駅家郷）。また、周辺には駅田（駅起田・駅料田）が置かれていた。

兵庫県龍野市の小犬丸遺跡は発掘調査の結果、山陽道の**播磨国布勢駅家**であることが確認されたが、こうした事例は少ない。その背景には郡家が駅家の業務を兼ねているものや駅長の私宅が駅家に充てられたものも少なくなかったために、駅家の施設部分とそれ以外の部分（郡家施設や駅長およびその家族の私的空間）との判別が困難なことによる。

古代の駅は兵部省の管轄下にあり、監督業務は現地の国司が担当し、実際の業務は駅戸と呼ばれる駅周辺の農家が行い、そのうち富裕で経験豊富な1名が駅長に任ぜられた。駅長の職務は駅使の送迎・接待、駅馬・駅子・駅船の用意、駅家・駅田の管理、駅稲の収納・支出など、駅家に関する運営業務全般を扱った。駅長は終身制であったが、駅長の死去もしくは老病などによる駅長の交替時に駅馬やその他駅家の備品を欠失させていた場合には、前任の駅長（あるいはその家族）がその欠失分を弁償しなければならなかった（天災などの不可抗力によるものは除く）。その代わり、在任中の課役（庸・調・雑徭）は免除されることになっていた。

菅原道真が「駅長莫驚時変改 一栄一落是春秋（駅長驚くことなかれ 時の変わり改まるを一栄一落、これ春秋）」という漢詩を詠んでいるが、これは藤原時平の陰謀によって失脚し、大宰府へ流された道真が、流されていく途中で立ち寄った駅家の駅長の同情に対して答えたものである。

山陽道の駅家

播磨国駅家 明石・賀古・草上・大市・布勢・高田・野磨・越部・中川

備前国駅家 坂長・珂磨・高月・津高

備中国駅家 川邊・小田・後月

備後国駅家 安那・品治・葦田

※太字の箇所は確認されているところ

駅鈴



駅鈴（えきれい）は、日本の古代律令時代に、官吏の公務出張の際に、朝廷より支給された鈴である。

646年（大化2年）1月1日、孝徳天皇によって発せられた改新の詔による、駅馬・伝馬の制度の設置に伴って造られたと考えられており、官吏は駅において、この鈴を鳴らして駅子（人足）と駅馬または駅舟を徴発させた。駅では、官吏1人に対して駅馬1疋を給し駅子2人を従わせ、うち1人が駅鈴を持って馬を引き、もう1人は、官吏と駅馬の警護をした。

現在残っている実物は、国の重要文化財に指定されている**隠岐国駅鈴**2口（幅約5.5 cm、奥行約5.0 cm、高さ約6.5 cm）のみである。この駅鈴は島根県隠岐の島町の玉若酢命神社に隣接する億岐家宝物館に保管・展示され、同神社宮司で隠岐国造の末裔である億岐家によって管理されている。ただし、隠岐国駅鈴の真贋はいまだ諸説あって、はっきりしていない。

二子塚古墳

福山市駅家町大字中島・大字新山

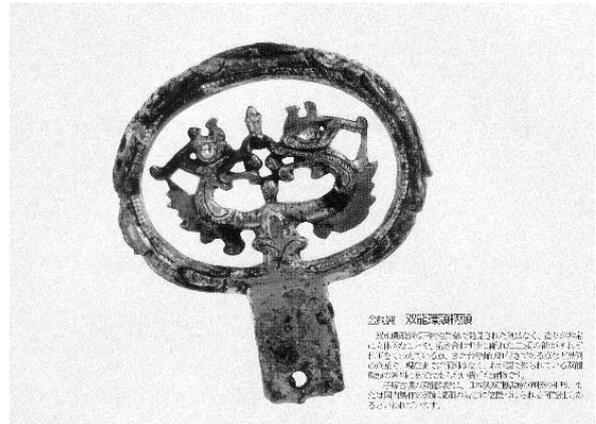


※巻末に資料がありますのでご覧ください。

【概要】

- ・ 6世紀末から7世紀初頭（古墳時代の終わり頃）頃造られた
- ・ 全長73m（周溝を含む）、墳丘全長68m（後期古墳では広島県内最大）
- ・ 墳丘は性質の異なる土を何種類か積み重ねた版築状の盛り土
- ・ 前方部と後円部に大型の横穴式石室がある（広島県唯一）
- ・ 後円部の横穴式石室は両袖式、全長14.9mで県内最長
- ・ 羨道の前側には石積側壁をもつ長さ約10mの墓道を付設
- ・ 玄室が後円部の中心より奥にあり、石室全体として長細い
- ・ 奥壁は一枚岩を使用している
- ・ 羨道入り口の天井石は、他の羨道天井石より一段高く構築
- ・ 石室内には、凝灰岩（**竜山石**）製の**組み合わせ式石棺**が納置
- ・ 副葬品として、多数の須恵器、金属製の馬具類、武器類が出土

・ **金銅製の双龍環頭柄頭**は瀬戸内沿岸で初の出土（全国的にも例のない意匠）



二子塚古墳は、横穴式石室を有する古墳時代後期の前方後円墳です。広島県東部を代表する古墳として、1948年（昭和23年）に広島県史跡に指定されました。近年、墳丘中央を縦断する市道を自動車を通るなど、墳丘が削れ、石室への影響が懸念されはじめました。そこで福山市教育委員会は、古墳の保存対策を講ずるため、発掘調査を実施しました。調査に当たっては、国庫補助金を受け、2002年（平成14年）8月から2006年（平成18年）3月にかけて、1次から4次にわたる測量調査及び発掘調査を実施しました。二子塚古墳周辺の地域は、大型の横穴式石室を備えた古墳や終末期古墳が集中的に多数存在します。また、丘陵の南には、**古代山陽道**が通り、九州と畿内の中間に位置し、山陰方面への交通路も開け、陸上交通の要衝で、古代吉備地域の西部にあって政治・経済の重要な地域でした。二子塚古墳をはじめとして、ここ備後南部地域に古墳時代後期の大型の巨石墳や、終末期の横口式石槨が集中していることは全国的にも珍しく、学会でも注目されています。ヤマト政権が確立していくこの時期に、二子塚古墳は、吉備勢力の弱体化をすすめるヤマト政権にとって、その解体をめざす拠点となった地域の重要な古墳といえます。なお、前方部の石室の天井石は抜き取られているものの、墳丘や後円部の石室はともに保存状態は比較的良好で、当時の設計・土木・運搬や副葬品製造等の技術水準の高さを知ることができる古墳としても貴重です。二子塚古墳は、こうした歴史的価値が高く評価され、2009年（平成21年）7月23日、**国の史跡**に

指定されました。

東西に伸びる丘陵の最高所に位置する前方後円墳で、東に後円部、西に前方部を造っています。墳形に沿って全周する周溝を検出し、断面は、後円部東側だけが葉研堀状で、深さ1.8mと深いが、その他は椀状の緩やかで浅い溝となっています。

くびれ部を断ち割った際、地山直上の明灰色シルト層から、3点の弥生土器がまとまって検出されました。

墳丘の盛土は、何種類かの質の異なる土を10cm前後の厚みで交互につき固めながら積み上げて版築状に築き、堅固な墳丘を形成しています。後円部の埋葬施設は、両袖式横穴式石室です。石室は巨大な花崗岩で構築され、玄室とそこに至る羨道で構成されています。さらに羨道入口から墳裾まで墓道が続き、この墓道の両側壁にも石が積まれているという、全国でも検出例が少ない構造です。

墓道の側壁は小型の花崗岩をほぼ垂直に積み上げたもので幅も広く、天井石は架からない開放の部分です。墳裾から羨道入口までの距離が9.8mと長いのが特徴で、**石室長14.9m**は県内最大級です。墓道部分と合わせて墳裾まで24.7mと非常に細長いのが特徴です。

玄室内に「**組み合わせ式の石棺**」を検出しました。2枚の床石のみが玄室内に残り、蓋石等は散逸していました。組み合わせると、蓋石2枚と小口石2枚が確認できましたが、側石が両側とも、石室外に持ち出されていることがわかりました。

石材はすべて**兵庫県（高砂市）産の竜山石**であることが特色です。石室内では、刀の飾り金具・馬具などの出土品も確認され、二子塚古墳は6世紀末から7世紀初頭ごろに築造されたと推定されます。

吉備津神社

福山市新市町大字宮内



福山市北西部、府中市との境に鎮座する。近くの府中市は備後国の国府のあった地とされるように、周辺は備後国の中心地であった。

備後国分立以前の吉備国を治めたとされる大吉備津彦命を主祭神に祀り、命の関係一族を配祀する。

江戸時代に造営された本殿は国の重要文化財に指定されており、他数棟が広島県・福山市の文化財に指定されている。また、重要文化財に指定されている狛犬・太刀数点が伝えられている。古来は「吉備津彦神社」とも称していたが、現在は備中一宮と同じく「吉備津神社」を正式名としている（備前一宮のみ吉備津彦神社を名乗る）。

大吉備津彦命（おおきびつひこのみこと）

第7代孝霊天皇の第三皇子。崇神天皇10年、四道将軍の一人として山陽道に派遣され吉備を平定した。

吉備国が三国に分離された後の806年（大同元年）、吉備国一宮であった吉備津神社より勧請して創建されたと伝えられる。しかし、その約百年後の905年から967年にかけて編纂された『延喜式神名帳』に記載がないことから、実際の創建はもっと後であるとする説がある。現在、神社の名前が最初に確認できる史料は1148年（久安4年）の八坂神社の記録『社家条々記録』であり、境内の発掘調査でも12世紀以降のものしか出土していない。

中世より備後国一宮として崇敬を集めた。広大な社領と多くの神人を有し、たびたび近隣の豪族と衝突していたため、1346年（貞和2年）には高師泰が備後国守護に神人の横暴を止めるよう命じている。戦国時代には毛利輝元より、江戸時代にはこの地を治めた福島氏、水野氏より社領の寄進があった。

草戸千軒町遺跡



草戸千軒町（くさどせんげんちょう）は、現在の広島県福山市にあった、鎌倉時代から室町時代にかけておよそ300年間存在した都市（大規模集落）である。

瀬戸内海の芦田川河口の港町として栄えた。遺跡の発掘調査から、時期によって町の規模は変遷しているが草戸千軒町は近隣にあった長和荘などの荘園と他の地方との物流の交流拠点として繁栄しており、数多くの商工業者がいたと見られ、遠くは朝鮮半島や中国大陸とも交易していたとみられている。また近くには現在も存在する**草戸稲荷神社**と**明王院**があり、その門前町としても繁栄していたものとみられている。

昭和時代後期（20世紀末）まで草戸千軒町の遺跡は芦田川の中州にあったが、遺跡の大部分が芦田川の洪水対策のために浚渫により破壊された。そのため、現在では遺跡の跡でしかない。また推定であるが芦田川東岸の河川敷にも遺跡が存在する可能性が指摘されている。遺跡からの出土遺物は**広島県立歴史博物館**で保存・展示されていて国の重要文化財に指定されている。また同博物館には往時の草戸千軒町の町並が実物大のジオラマで一部再現されている。なお、往時には瀬戸川河口に広がる沖積地に町があり、東方には福山湾が広がっており交通の要所であったことから発展したと見られている。また、遺跡からは多くの栽培植物も出土している。

長年埋もれた後に昭和時代になって発掘されたことから「**東洋のポンペイ**」ないし「**日本のポンペイ**」といった呼ばれ方をされているが、最盛期に埋没したポンペイとは違い、完全に洪水で川の底に埋まった時期には既に町としては廃絶に近い状態であったとみられている。これは

福山城が築かれた江戸時代初期までには芦田川の堆積作用により港町としての機能が失われ、寂れていたとみられ、当時は数件の民家と田畑があるだけであった。

「草戸千軒」の名は、江戸時代の中頃（元文から安永年間）に備後福山藩士・宮原直弼によって書かれた地誌『備陽六郡志』の中に、「草戸千軒という町があったが、寛文13年（1673年）の洪水で滅びた」という伝承が記載されていたことから名付けられたもので、町についての様子は書かれていなかったため、想像上の幻の町といわれていた。

昭和時代に入った1930年前後の河川工事によって遺物が出土しようやく存在が確認され、戦後になって1961年から約30年間にわたり断続的に行われた大規模な発掘調査が行われたことで全容が判明した。ただし、遺跡自体は治水のため浚渫工事が行われたため破壊された。遺跡のあった中州が一部残されている。

明王院

福山市草戸町



明王院（みょうおういん）は広島県福山市草戸町にある**真言宗大覚寺派**の仏教寺院である。芦田川に面した愛宕山の麓にあり草戸稲荷神社が隣接している。かつては**常福寺**と言われており、中世には草戸千軒町が、門前町として栄えていたところとして有名である。**本堂と五重塔は国宝**に指定されている。**中国三十三観音霊場第八番札所、山陽花の寺二十四か寺第十八番札所**。寺伝によると、明王院の前身である「常福寺」は807年（大同2年）に空海（弘法大師）によって創建されたという。この由来の根拠は江戸時代に作成された棟札によるものであるが、ほぼ同時期に作成された棟札がもう1枚あり、こちらには大同年中に「初住持沙門」と呼ばれる僧侶によって創建されたと記されている。当寺の本尊十一面観音像は平安時代前期にさかのぼる作品

であり、寺の草創もその頃にさかのぼるものと推定される。中世には門前に草戸千軒町（川底に埋もれた中世遺跡として著名）が栄えた。江戸時代には福山藩主となった水野家・阿部家の庇護の下で繁栄した。

国宝 明王院本堂



鎌倉時代1321年（元応3年）に建立された仏堂。和様建築に鎌倉時代以降の新様式である大仏様（だいぶつよう）、禅宗様を加味した折衷様建築の代表例とされている。内部の外陣に見られる輪垂木（わだるき）を用いたアーチ型の天井は、近世の黄檗宗寺院の建築にしばしば見られるものだが、中世には珍しい。

国宝 明王院五重塔



南北朝時代の1348年（貞和4年）に建立された純和様の五重塔。初層内部の四天柱（仏塔の初層内部に立つ4本の柱をさす）、板壁などには極彩色の仏画や文様が描かれている。相輪の刻銘には、この塔が当時の繁栄した草戸千軒の経済力

を背景に、ささやかな民衆の浄財を募って建立されたことが明記されている。

重要文化財（国指定）

木造十一面観世音菩薩立像（本尊）

平安時代前期の作で像高148.5cm。頭上面は髻（もとどり）の頂に阿弥陀仏一面、地髪上前面に菩薩面三・左側面に忿怒面三・右側面に牙をむく忿怒面三・背面に大笑面一の計十一面を頂く。作られた当時は彩色されていたようであるが、現在では褪色している。

【引用および参考文献】

□一備陽史探訪の会創立三〇周年記念一『福山の遺跡100選』 備陽史探訪の会 平成22年9月初版第1刷発行

備陽史探訪の会

■事務所

〒720-0824 福山市多治米町5丁目19番8号

田口義之方

電話(084)953-6157

E-mail:b-tan-kai@009191.com

ホームページ

<http://www3.plala.or.jp/big-eye/>

■会長

初代 神谷和孝(1980~1990)

二代(現)田口義之(1990~)

■構成員

267名(2010年7月現在)

■主な活動

例会(史跡めぐり)年10回程度

歴史講演会 年3回程度

親と子の古墳めぐり 毎年5月5日実施

古墳講座・中世を読む会・古事記を読む・重伝

建を歩く 毎月実施

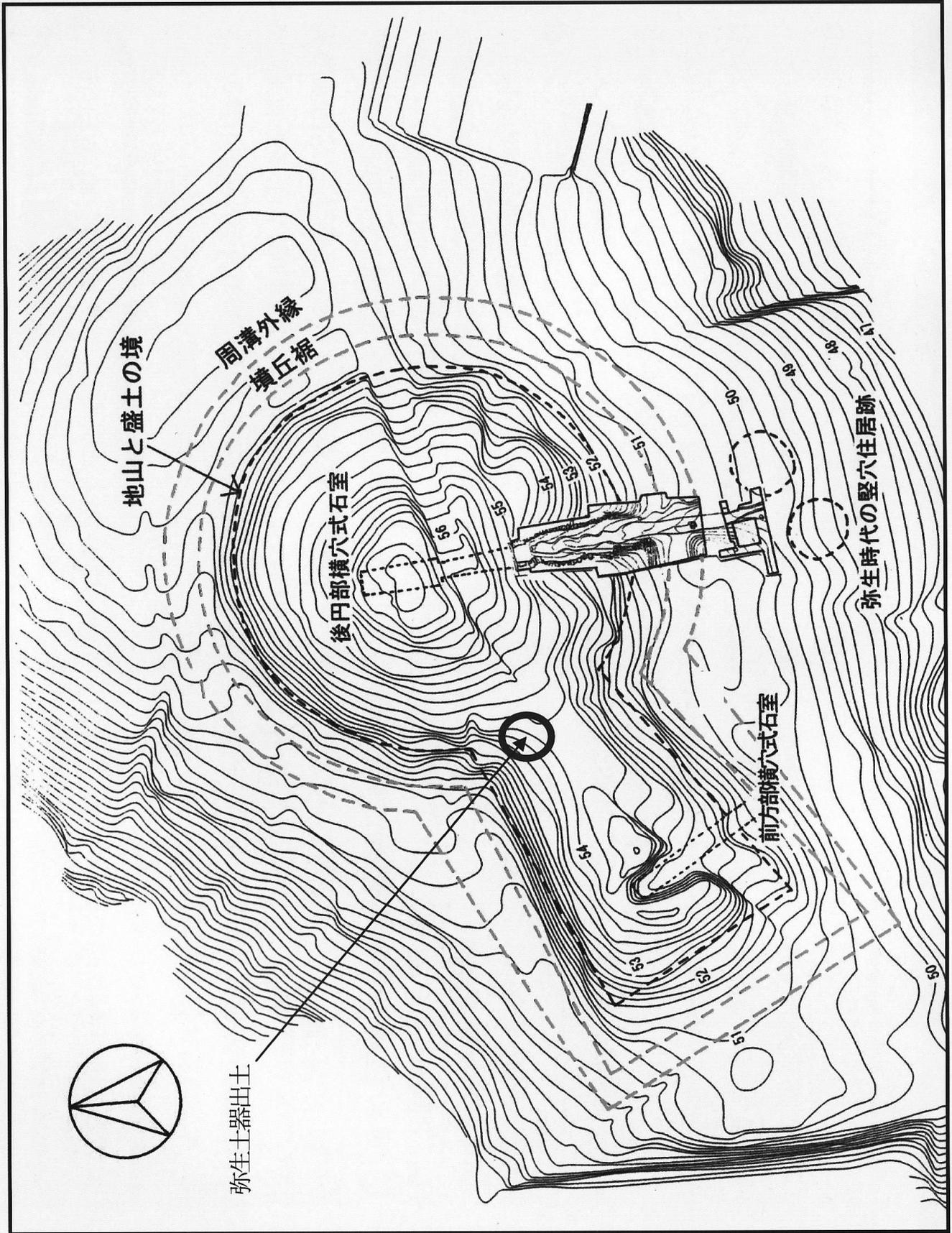
■定期刊行物

会報「備陽史探訪」(偶数月発刊A4版16ページ約350部)

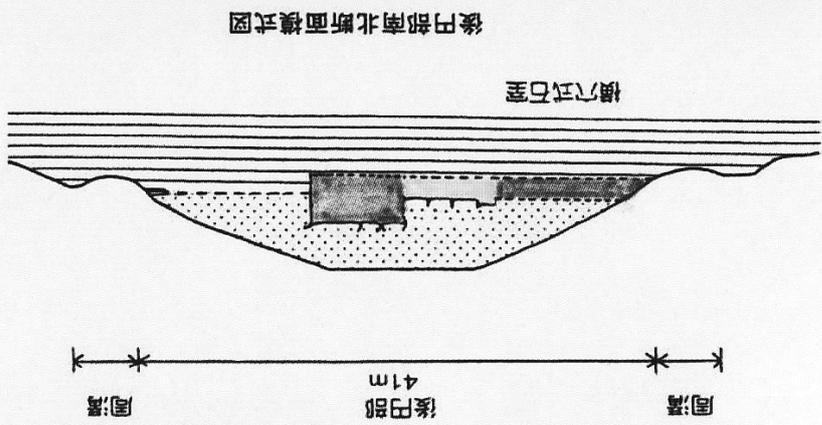
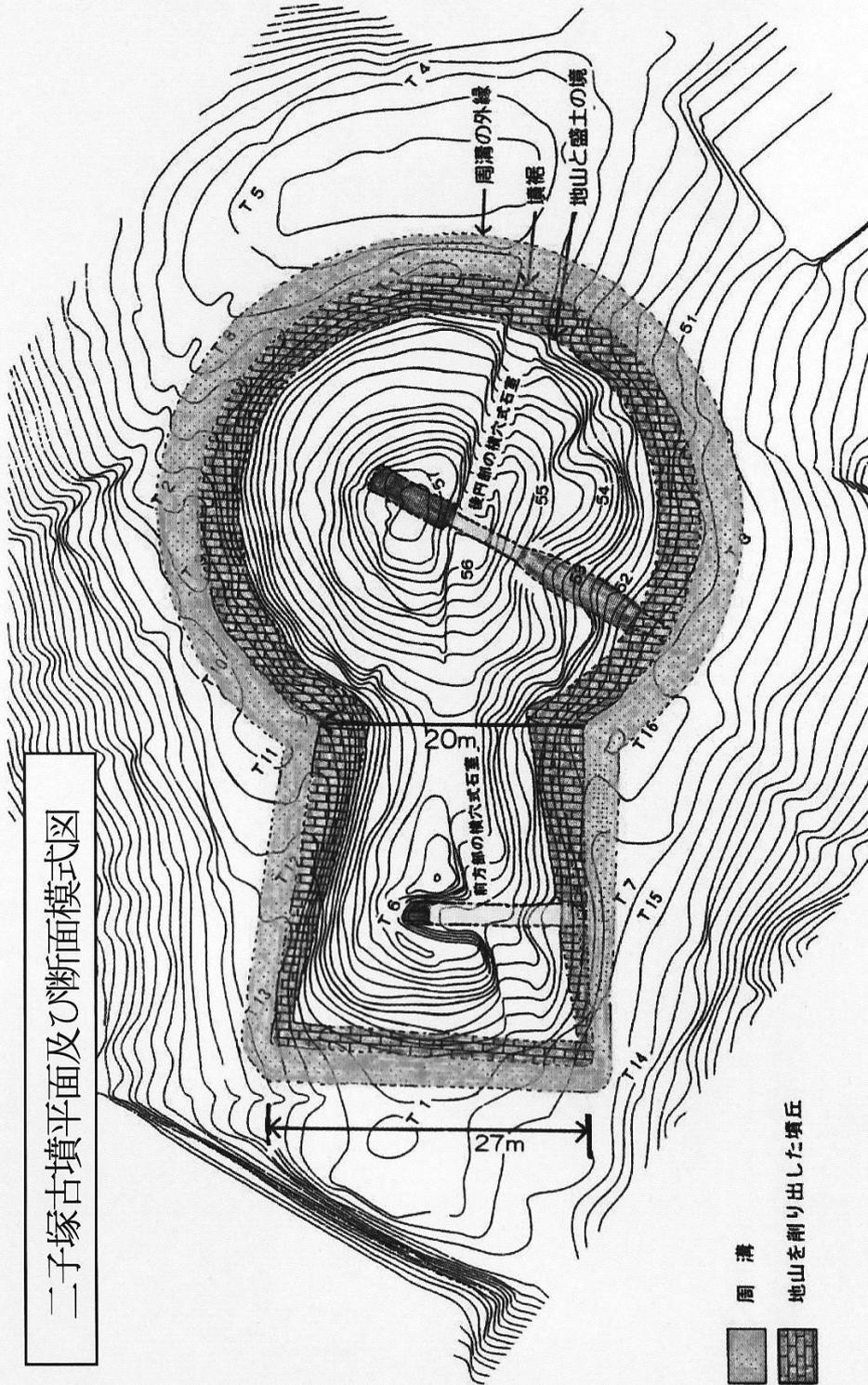
行事案内 (奇数月発行B5版8ページ 300部)

論文集「山城志」 (年一回発行A4版50ページ 500部)

□国指定史跡一図版編一二子塚古墳 福山市文化財協会 2009年(平成21年)7月31日 初版発行



二子塚古墳平面及び断面模式図



盛土 種類の異なる土を交互に積み上げていく版築状盛土

東西断面模式図 (---破線は推定)

